



私たちの思いを聞いて！・・・『豊見城市少年の主張大会』

7月2日(水)に豊見城市中央公民館において、令和7年度 第42回『豊見城市少年の主張大会』が開催されました。市内4中学校から各学校代表2名が自作の主張文を発表しました。本校からは3年生の松山寧維さん、平良泰虎さんの2名が発表しました。自分の今の思い・考えを自分の言葉で素直に表現した中学生らしい素敵な発表でした。



～小さな虫と切り開く「未来」～

3年4組 松山寧維さん

皆さんは虫が好きですか？「苦手」、「気持ち悪い」と感じる人も多いと思います。実際、僕が「虫が好き」と言うと「変わっている」と言われることもあります。先日も友達と話していると、「うわっ、虫！」という声が聞こえ、小さなバッタを見た友達は顔をしかめて後ずさりしていました。虫が苦手な人が多いのは理解できます。過去に不快な経験をした人もいるでしょう。でも、だからといって、「虫なんていなくていい」と思うのは論理の飛躍だと思うのです。



僕が虫が好きになったきっかけは祖父の影響でした。祖父は蜂を飼っていて、巣箱の中を見せてくれたり、とりたての甘い蜂蜜を食べさせてくれたりしました。小さな体でせっせと働く蜂の姿はとてもかっこよく、僕にとって虫は身近でかけがえのない存在になりました。

しかし、最近の沖縄では、虫の姿が減っていると感じます。昔は花壇の周りを飛び回っていた蜂も、今ではあまり見かけません。草花が咲いていた場所がコンクリートに覆われ、住宅や駐車場に変わったからです。植物が減れば、そこに集まっていた虫たちも生きられませんか。僕がよく行く公園でも、以前はナナフシやカマキリがたくさんいましたが、今はほとんど見かけず、代わりに外来のカタツムリや見慣れない生き物が増えています。これは虫の種類が変わっただけでなく、その地域の自然環境が変わり、生態系が崩れ始めているという静かな警告なのです。

虫がいなくなってしまうのは人間です。蜂は花から花へ飛び、花粉を運ぶことで野菜や果物が実るのを助けています。もし蜂がいなければ、作物の実りが悪くなり、私たちの食べ物が減ってしまうかもしれません。養蜂家からも「ミツバチの数が減っている」との声が上がり、受粉への影響が深刻化しています。また、イジユやリュウキュウチクなど沖縄の代表的な植物も減り、それを食べる固有の昆虫も姿を消しつつあります。リゾート開発や森林の分断、外来種の侵入といった問題が重なり、生物多様性が危機に瀕しているのです。

たとえ虫が苦手でも、その生態について知ろうとし、小さな生態系の中で果たすべき役割があると理解することが大切だと思います。僕は家の中で虫を見つけたとき、ティッシュやコップで安全にすくい、外の草むらにそっと逃がしています。びっくりすることもあります。少しの工夫で命を守れるからです。こうした行動が積み重なれば、自然や社会を守る大きな力になると信じています。

また、虫が暮らせる場所を増やすため、身近な活動にも力を入れたいです。地域の清掃活動ではゴミ拾いだけでなく、道ばたに花を植えたり、学校のプランターで在来種の植物を育てたりする取り組みを提案したいです。街路樹や公園の緑を守ることで、虫の居場所を少しでも取り戻せると思います。さらに、こうした活動が、地域の人たちが身の回りの自然に目を向けるきっかけになれば嬉しいです。

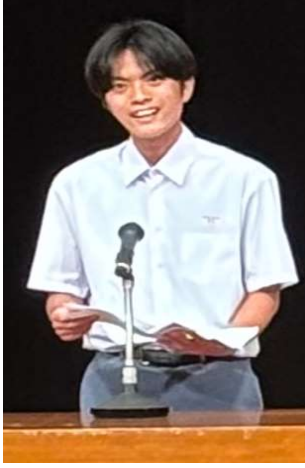
僕の将来の夢は、沖縄の自然を守る「自然保護官」や、虫の生態を研究しその大切さを伝える「昆虫学者」になることです。そのために理科や生物の勉強をがんばり、自然観察会やボランティア活動にも積極的に参加しています。

小さな虫たちは私たちの生活と深くつながる大切な仲間です。僕たち一人ひとりが小さな命に目を向け、守ろうとする気持ちを持つことが、未来を明るくすると信じています。

そして最後に、「一寸の虫にも五分の魂」ということわざのように、どんなに小さな命にも大切な意味があることを伝えたいのです。

～「僕を上げるもの」～

3年4組 平良泰虎さん



皆さんを上げているものはなんですか？私を上げているもの、それは「エイサー」です。

夏の夜に鳴り響く力強い太鼓の音。勇壮な踊りに見とれる観衆。心がひとつになる会場の熱気。それが、私の愛する「エイサー」です。

小学生の頃、私がエイサーを始めたきっかけは、地域の祭りで見た迫力のある演舞への感動からでした。私は、その姿に憧れ、エイサーの世界に足を踏み入れました。それに、創作エイサーの団体に所属している姉が、演舞のときには、大きな声を出し、体いっぱい踊る姿を目にし、そのかっこよさに憧れたことも、私の背中を押してくれました。気がつけば、私の中にも太鼓の音が響くようになりました。今は部活動と両立し、日々の練習に励んでいます。

しかし、ときには、学校行事や勉強とバランスがとれず、エイサーの調子が狂うこともあります。部活動の大会前になると疲れも出て、「今日はもういいや」と練習に前向きになれないこともありました。そんな調子の悪い日が続いても、エイサーの練習に参加すると不思議と気持ちがいっしょとして、自分自身を鼓舞しながらエイサーに向き合い続けてきました。

沖縄の人々は歴史の中で異文化を取り入れながら、自分たちのルーツである祖先を大事にして、エイサーの響きとともに歩んできた。このことが、「かっこよさ」や「感動」からエイサーを始めた私自身を足元から支える土台になっています。

現に、今私はエイサーの良さをより多くの人に知ってもらうことを目標に、日々の活動に取り組んでいます。「かっこいい」から始まった私のエイサーは、今度は誰かに感動を届けること、思いをより多くの人に繋ぐことに変化していったのです。

私たちが、イベントや福祉施設などで公演を行うたびに、たくさんの人から「元気をもらった」「涙が出た」という言葉をいただきます。もらう言葉の一つ一つが、私の心に強く残り、私自身を大きく成長させてくれます。

私にとって沖縄の文化を形作るものの中で、エイサーは絶対に外せません。踊りや太鼓の音だけではなく、そこに込められた思い、先人たちから受け継がれてきた歴史、人と人との深いつながり。それこそが私を形作る文化そのものだからです。沖縄は、歴史的に様々な苦難を経験してきました。戦争や貧困、そして異文化との接触。そのたびに人々は、エイサーを通して心をついにし、困難を乗り越えてきたのです。「エイサー」それはすなわちウチナーンチュの心の支えであり、「沖縄の絆」の象徴として、踊りそのものに力が宿っているのです。

ですが、そんな大切なエイサーも近年、若者のエイサー離れが進み、後継者不足が深刻な課題になっています。地域の祭りや学校での体験の場が減少し、エイサーに触れる機会が少なくなっているのです。私の所属する団体も例外ではありません。かつては夏になると、どこからともなく太鼓の音が聞こえ、町中がエイサー一色に染まっていた光景も、今では少なくなりました。このままでは、沖縄の大切な文化の一つであるエイサーが、静かに消えてしまうかもしれない。そう考えると、私は強い危機感を覚えます。

六年前の十月三十一日未明、沖縄のシンボルとも言える首里城が消失しました。幼かった私の記憶にも当時のニュース映像が鮮明に焼きついています。そのころは、その重大さを正面から受け止めることができませんでしたが、時代を超えて繋がれてきたエイサーの魅力に気づいた今、私には首里城焼失のニュースの重大さがはっきりわかるのです。形あるものはいつか無くなる日が来ます。そして、それが訪れる日はいきなりやってきます。私は「その日」が来てしまった時の喪失感や大きな悲しみを、エイサーに感じたくないのです。

だからこそ、私はエイサーを続けていきたいし、エイサーの魅力を伝えたい。伝える義務があるのです。文化の火を絶やさずに次の世代に繋げていくこと。それが、今の私にできる恩返しだと思います。沖縄の太鼓の音が、これからもずっと鳴り響き、世界中の人々の心に届くように。世界との架け橋になるように。私の中に息づく太鼓の音とともに、この文化を未来へと伝えていきたいのです。

皆さんを上げているものは何ですか？

私の答えは、太鼓の音とともに沖縄の人々の心に宿る「文化の鼓動」です。